

陸公民館主催講座

# 平安貴族とその時代

—光さす王朝文化—

2024年12月14日・2025年1月11日・2月1日開催

大河ドラマで初めて取り上げられた平安時代。政治・文化・庶民の生活を通して、398年続いた秘密とその後の時代に与えた影響を学びました。



ワンポイント講座

## 藤原道長が詠んだ“あの歌”の新解釈

この世をば わが世とぞ思う 望月の 欠けたることも なしと思えば

この有名な歌は、「この世はまるで自分の世のように思われる。満月が少しもかけるところがないように、望みすべてがかなって満足だ」と権勢の絶頂にある藤原道長が自らの栄華を詠んだ歌として、従来解釈されてきました。

ところが、近年の研究によって新説※1が発表され、大河ドラマでもその説が採用された※2ことをご存じでしょうか。

まず、この歌が詠まれた場面は、以下の状況であったと考えられています。

- ① 2人の娘に続き、3人目の娘が天皇の後(皇后)になった祝いの席であり、その娘が3人とも出席していた。
- ② この祝宴が開かれた日は十六夜月で、満月ではなかった。

この状況から導かれた新解釈は、「今日の夜の宴が開かれたことに私は満足している。目前の月は欠けているが、私の月(皇后となった娘たち)3人が欠けることなく揃い、そして宴席の皆と交わした杯は欠けていないことを思う」と素直な気持ちを詠んだ歌であるという説です。従来の道長のイメージを180度覆すような新解釈ですね。

※1令和3年京都先端科学大学 山本淳子教授が発表、※2国際日本文化センター 倉本一宏教授が大河ドラマの時代考証を担当